

一、次の俳句とその鑑賞文を読み、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。なお、A～Cはそれぞれ俳句を示す記号である。 [H18]

- A 心太煙のごとく沈みをり 日野 草城
 B 花しだれ滝の音なきごとくあり 宮津 昭彦
 C 春昼の廊下のごとき電車かな 仁平 勝

直喩を使ったものをいくつか引いてみました。どうでしょうか。心太が「煙」に、枝垂桜が「」に、電車が「廊下」にたとえられています。みなさんにもふと、そんなふうに見えることはありませんか。それぞれ比喩の関係だけを見ると、いかにも奇抜に思えますが、像としてはきわめてリアルに思えます。

最後のは自分の句ですが、あるとき平日の空いた電車に乗っていたら、ふと病院かなにかの廊下のように思えたのです。ほかの作者もおそらく、あれこれと比喩を考えながら見ているわけではなく、自分の目に忠実に、文字通り見たまを率直に詠んでいるのです。そこから比喩が生まれるのは、人間の目がカメラの目ではないからです。

思うにわたしたちは、けっきょくものを自分の見たいように見ているのかもしれない。だからこそ、見たままに写すといった写生の方法が、そのまま自己表現として成り立つのです。だとすれば、写生のポイントは、世間に流布されている価値観にとらわれずに、自分の目に素直になることだといつていいでしょう。

では、どうすれば自分の目に素直になれるのでしょうか。いくらか逆説めいて聞こえるかもしれませんが、じつは俳句の写生というのは、ただ正直にも見るのではなく、ありまぜん。あらかじめ作爲的に見るのです。そうでなければたぶん、世間の価値観から自由になれないのです。

(仁平 勝『俳句をつくらう』による)

(注) 心太：テングサなどを煮とかして、冷やし固めてめん状にした食品。
 流布：広く知れわたること。

(1) A～Cの俳句の季節の組み合わせとして適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

- ア、Aー夏 Bー夏 Cー春
 イ、Aー夏 Bー春 Cー春
 ウ、Aー春 Bー夏 Cー夏
 エ、Aー春 Bー春 Cー夏

(2) 鑑賞文中の に当てはめる言葉として適切なものを、Bの俳句の中からそのまま抜き出して書け。

(3) 鑑賞文中の「線部に「自分の目に素直になる」とあるが、筆者はどうすることによってそれができると述べているか。鑑賞文中から十一字でそのまま抜き出して書け。

一、次の短歌を読んで、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。なお、A～Eはそれぞれ短歌を示す記号である。 [H19]

- A 雨蛙なきいでにけりとりのり 若山 牧水
 B さびしさは拗ねてゐし子がしみじみと 四賀 光子
 C ふりかへる秋篠寺のやぶかげの 小野 興二郎
 D 山鳩の声聞きがたし松原を 島木 赤彦
 E こつこつと空地に石をきざむ音 石川 啄木
 耳につき来ぬ 家に入るまで

(注) とよもす：鳴り響かせる。

(1) A～Eの短歌の中で、体言止めが用いられているものを一つ選び、その記号を書け。

(2) Aの短歌には、意味や調子のうえで大きく分かれて句の切れ目になっているところがある。句の切れ目がAの短歌と同じものを、B～Eの短歌から一つ選び、その記号を書け。

(3) 次の1・2は、短歌の鑑賞文の一部である。1・2は、A～Eのうちどの短歌のものか。それぞれ一つずつ選び、その記号を書け。

1 時間が過ぎてても耳を離れない音があった。硬い響きの擬声語を用いることによって、恵まれない境遇にある作者の暗い心情が効果的に表現されている。

2 同音をくり返すことで流れるような響きが生み出されている。ひっそりとした情景の中で、現実には聞こえない声が見え、何事かを作者に語りかけているように見えた。

一、次の俳句とその鑑賞文を読み、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。なお、A～Cはそれぞれ俳句を示す記号である。 【H18】

- A 心太煙のごとく沈みをり 日野 草城
- B 花しだれ滝の音なきごとくあり 宮津 昭彦
- C 春昼の廊下のごとき電車かな 仁平 勝

直喩を使ったものをいくつか引いてみました。どうでしょうか。心太が「煙」に、枝垂桜が「廊下」に、電車が「廊下」にたとえられています。みなさんにもふと、そんなふうに見えることはありませんか。それぞれ比喩の関係だけを見ると、いかにも奇抜に思えますが、像としてはきわめてリアルに思えます。

最後のは自分の句ですが、あるとき平日の空いた電車に乗っていたら、ふと病院かなにかの廊下のように思えたのです。ほかの作者もおそらく、あれこれと比喩を考えながら見ているわけではなく、自分の目に忠実に、文字通り見たまを率直に詠んでいるのです。そこから比喩が生まれるのは、人間の目がカメラの目ではないからです。

思うにわたしたちは、けっきょくものを自分の見たいように見ているのかもしれませんが。だからこそ、見たままに写すといった写生の方法が、そのまま自己表現として成り立つのです。だとすれば、写生のポイントは、世間に流布されている価値観にとらわれずに、自分の目に素直になることだといっていじょう。

では、どうすれば自分の目に素直になれるのでしょうか。いくらか逆説めいて聞えるかもしれませんが、じつは俳句の写生というのは、ただ正直にも見るのではなく、ありのまま、あらかじめ作爲的に見るのです。そうでなければたぶん、世間の価値観から自由になれないのです。

(仁平 勝『俳句をつくろう』による)

(注) 心太：テングサなどを煮とかして、冷やし固めてめん状にした食品。
流布：広く知れわたること。

(1) A～Cの俳句の季節の組み合わせとして適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

- ※とてろてん 花(桜のこと) 春 春昼 春
- ア、Aー夏 Bー夏 Cー春
- イ、Aー夏 Bー春 Cー春
- ウ、Aー春 Bー夏 Cー夏
- エ、Aー春 Bー春 Cー夏

(2) 鑑賞文中の [] に当てはめる言葉として適切なものを、Bの俳句の中からそのまま抜き出して書け。

※前後を見ると、何にたとえられているかを考えればよいので、「枝垂桜」は「滝」にたとえられている。

(3) 鑑賞文中の「線部に「自分の目に素直になる」とあるが、筆者はどうすることでそれができると述べているか。鑑賞文中から十一文字でそのまま抜き出して書け。

あ ら か じ め 作 為 的 に 見 る

一、次の短歌を読んで、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。なお、A～Eはそれぞれ短歌を示す記号である。 【H19】

- A 雨蛙なきいでにけり／とりどりの 木々の若葉のゆれあへる中に 若山 牧水
- B さびしさは拗ねてゐし子がしみじみと 夕日の窓に読書する声 四賀 光子
- C ふりかへる秋篠寺のやぶかげの 椿の花はみなもの言へり 小野 興二郎
- D 山鳩の声聞きがたし／松原を 島山 赤彦
- E こつこつと空地に石をきざむ音 耳につき来ぬ 家に入るまで 石川 啄木

(注) とよもす：鳴り響かせる。

(1) A～Eの短歌の中で、体言止めが用いられているものを一つ選び、その記号を書け。

※体言止めとは、文末が名詞で終わっているものをいう。Bの「読書する声」の「声」が名詞なので、Bが体言止めである。

(2) Aの短歌には、意味や調子のうえで大きく分かれて句の切れ目になっているところがある。句の切れ目がAの短歌と同じものを、B～Eの短歌から一つ選び、その記号を書け。

※意味や調子のうえで大きく分かれて句の切れ目になっているところを「句切れ」という。Aの短歌は「雨蛙なきいでにけり」できれているので、「二句切れ」である。Dの短歌が「／がたし」と二句目で切れている。

(3) 次の1・2は、短歌の鑑賞文の一部である。1・2は、A～Eのうちのどの短歌のものか。それぞれ一つずつ選び、その記号を書け。

1 時間が過ぎてても耳を離れない音があった。硬い響きの擬声語を用いることにより、恵まれない境遇にある作者の暗い心情が効果的に表現されている。

※「擬声語」に着目する。「硬い響きの擬声語は」Eの短歌の「こつこつと」を指しているので、正解はE。

2 同音をくり返すことで流れるような響きが生み出されている。ひっそりとした情景の中で、現実聞こえることのない声、何事かを作者に語りかけているように見えた。

※「同音をくり返すこと」は「とてろてん」とあるので、くり返す同音はCの「秋篠寺の」「やぶかげの」「椿の」「の」「であることから、正解はC。

C

E

D

B

イ

滝